氏　　名	梅澤　篤之介
学　　位	博士　(芸術学)
学位記番号	博　(芸)　甲7号
学位授与年月日	平成18年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文名	Ansel　Adams
審査委員	主査　教授　関　　隆志
	教授　倉澤　行洋
	教授　中村　貞夫

論　文　目　次

『Ansel　Adams研究』目次

緒論

序章　Ansel　Adamsの年譜

目次

はじめに

1節　誕生以前

2節　誕生：ゼロ歳　1902年

3節　10歳　1912年

4節　20歳　1922年

5節　30歳　1932年

6節　40歳　1942年

7節　50歳　1952年

8節　60歳　1962年

9節　70歳　1972年

10節　80歳　1982年

11節　82歳　1984年

12節　没後

参考文献

第1章　Ansel　Adamsの写真制作技術

目次

はじめに

1節　白黒写真

2節　Ansel　Adamsの新写真技術叢書

3節　Ansel　Adamsの写真制作への門出

4節　「想定」

5節　ゾーンシステム・Zone System

5－1　ゾーンシステムとは何か

5－2　ゾーンシステムの用語

5－3　被写体ヴァリューと被写体輝度

5－4　被写体ヴァリュー域

5－5　被写体輝度

5－6　被写体輝度ゾーン

5－7　ネガ濃度ヴァリュー域

5－8　ゾーンシステム模式図とゾーンスケール

5－9　質感範囲とヴァリュー域
5－10　ゾーンVの補正
5－11　ゾーンとプリントヴァリュー
6節　「おく」と「くる」－Place and Fall
6－1　「おく」と「くる」によるヴァリュー制御
6－2　Ansel　Adamsによるヴァリュー制御の実例
7節　拡大と短縮－Expansion and Contraction
7－1　拡大と短縮の概念
7－2　拡大と短縮の原型
7－3　拡大と短縮の限界
7－4　フィルム特性曲線に観る拡大と短縮の効果
7－5　Ansel　Adamsによる拡大と短縮のヴァリュー制御の実例
8節　前露光
8－1　前露光の概念
8－2　Ansel　Adamsによる前露光の実例
9節　フィルタ技術
9－1　ゾーンシステムとフィルタ技術
9－2　フィルタの種類と効果
9－3　Ansel　Adamsによるフィルタ技術実例
10節　ネガヴァリュー制御としてのゾーンシステム
11節　プリント
11－1　Ansel　Adamsのプリント技術
11－2「想定」とプリント
11－3　ファインプリント制作概念
11－4　Ansel　Adamsによるファインプリントの定義
11－5　Ansel　Adamsのプリント工程
Ansel　Adamsの技術　結語

第2章　Ansel　Adamsの自然

目次

はじめに
1節　Ansel　Adamsの自然
2節　Ansel　Adamsをはぐくんだ自然
3節　Ansel　Adamsの父となった自然
4節　眺める自然
5節　Ansel　Adamsを育てた自然
6節　ヨセミテ
7節　日本人の山行き
7－1　正岡子規『旅の旅の旅』

７－２　河口慧海『西域旅行記』
８節　会津八一の自然とAnsel　Adamsの自然
９節　日本人とAnsel　Adamsの自然
10節　砂丘の消滅：Ansel　Adamsをはぐくんだ自然の消滅
Ansel　Adamsの自然　結語

引用文献
参考文献

第３章　Ansel　Adamsの作品
目次
はじめに：Ansel　Adamsの自然作品の特徴
１節　眺める自然
２節　踏みしめる自然
Ansel　Adamsの作品　結語
文献

終章　創造的写真の未来
目次
はじめに
１節　視覚芸術における写真の位置
２節　ピクトリアルアートと純粋美術
３節　ピクトリアルアートのAnsel　Adamsへの影響
４節　ファインプリントの伝達手段
５節　芸術作品の条件
６節　創造的写真の未来
創造的写真の未来　結語
引用・参考文献

謝辞

学位論文内容の要旨

写真は、その歴史において、平面画像として発祥し、絵画を目指した時期もあった。写真画像は機械、化学の産物であるフィルム、印画紙、さらに現像、定着などに化学薬品を使って創られる。画像は安定性に欠け、恒常性などは絵画とはかけ離れて短い。それらのためか、何時しか写真という独自の枠が生まれ、その枠の中で作品の優劣を競うようになった。

本論文『Ansel　Adams研究』はAnsel　Adamsの提唱する白黒銀塩写真による「創造的写真」が、彼の写真制作思想、制作技術、作品の芸術性の高さから、「写真の範疇から、写真という枠から出て、油彩画や版画に代表される絵画の領域に入るべきである」とすることを主題とし、論旨をすすめている。言い換えれば、本研究は、「創造的写真」は「絵画と同様に美術であり、高度な芸術作品である」とするのが論旨となっている。

各章においては、この論旨の実証と展開を試みている。また、写真には、幾つかの分野があり、本研究ではこれを、「記録」、「発見」、「創造」に分類している。

Ansel　Adamsは、「創造的写真」について明確な定義を残していないが、上記の分類の中で、「創造」の分野の概念が、彼の提唱する「想像的写真」に近いであろう。

論者は、彼の『自叙伝』をはじめとする著作から、彼の作品制作思想である撮影時の「想定」、現実の撮影では「ゾーンシステム」によるネガヴァリューの制御、さらに暗室におけるプリント作業時のプリントヴァリューの制御、加えて200年以上はプリント画質を変化させず、プリントされた時の新鮮さを保つ高度な白黒写真処理技術によって制作された恒常性を持つ作品こそが「創造的写真」であると考えている。

もちろん、「創造的写真」は、本論終章に添付したBeaumont Newhall, *"History of Photography"*の第９章「ピクトリアル写真」にあるように、ネガ、プリントには如何なる修正、加筆、画き込みも行われていない作品であり、Newhallが *"History of Photographe"*第10章で示す「ストレート写真*1」のことである。

本論文には、写真、その他の専門用語が使われている。これらの用語は特殊であり、今日では写真の専門家ですら使わないものも多くある。そこで、本論文には用語解説の項を設けた。また本要旨には、その用語解説を転載している

本論文は、40字、40行を１頁とし520頁を超える（原稿用紙概算で2,100枚）数となり、薄手のPC用紙を使用してもかなりの分量となるため、上巻・中巻・下巻の３巻とした。各巻は次のように編集した。

上巻：緒論、序章Ansel　Adamsの年譜、第１章Ansel　Adamsの写真技術、第２章Ansel　Adamsの自然

中巻：第３章Ansel　Adamsの作品。作品複製50点を添付

下巻：終章　創造的写真の未来、バーモント・ニューホール『写真の歴史』第9章ピクトリアル写真、第10章ストレート写真。

Beaumont Newhall, "*History of Photography*"

Chapter 9 "Pictorial Photography"

Chapter 10 "Straight Photography"

を添付している。

また、本研究の方法と論文の構成を記し、各章ごとにその章の要旨を述べている。

さらに、本要旨と論文と組み合わせを容易にするために、論文の目次と参考文献を付記した。

注

*1 Beaumont Newhallは、Ansel Adamsの「創造的写真」の制作工程に含まれる「想定」を考慮しなかったことにより、「創造的写真」を「ストレート写真」としたとも考えられる。

学位論文審査報告

1．本研究の学位論文としての特色とその評価

1）研究テーマの特色

本研究は、宝塚造形芸術大学大学院造形研究科博士課程（後期）造形・デザイン専攻〔研究領域：基礎造形〕に提出され受理された博士論文である。

論文の題目は「Ansel　Adams研究」で、銀塩写真において「創造的写真」を提唱した20世紀最大の風景写真家A．アダムズの作品制作思想、並びに写真制作技術を精緻に分析して考察を行っている。本研究において論者は、ただ単に一写真家としてのA．アダムズ論を目指すのではなく、アダムズの提唱する、いわゆる「創造的写真」がアダムズの写真制作思想、写真制作技術、及び作品の芸術性の高さから、「絵画と同様に芸術であり、高度な芸術作品である」との結論を導き出している。即ち、A．アダムズの「写真」が油彩画、日本画等の「絵画」伍して、平面芸術の一分野となりうる高い芸術性を備えている事実を実証していることに、その特色が認められる。

2）研究方法の特色

本研究の特色は、論者の経歴が示すように、長く、かつ高い学術環境を通して得た経験に基づく方法論に見られる。つまり、論者が大きな影響を受けた、東洋美術史家、会津八一による美術史研究方法論、即ち、「研究対象となる美術品の実物と文献を車の車輪のように使う」ことを研究の礎としている。

論者は、長期にわたった米国滞在中、並びに日本において、研究対象であるA．アダムズの写真を鑑賞する機会を持ったが、論者が定義するところの「オリジナルプリントに直接触れる機会」、即ち、オリジナルプリントを額から取り出し、生の写真を観察する機会を持ち得なかったために、個々の作品の評価、論評は避けるという極めてストイックな態度で研究に臨んでいる。一方、文献の扱いには、第一次資料としてA．アダムズ自身が記述した著作のみに限る、厳密さを守っている。そして、補助文献として、A．アダムズの自叙伝（*Ansel Adams —An Autobiography*）の編者であるMary Street Alinderの記述のみを採用している。こうした、慎重な研究態度と用心深い資料の取り扱い方が、本研究の特色である。

3）本研究の学位論文としての評価

本研究の論者は、大学で長く、かつ豊かな教育・研究環境の中に身を置いた経歴を有している。その結果、A．アダムズの写真制作技術及び制作思想の研究において、ただ単にアダムズの著作から言葉を引用して日本語に訳すという水準をはるかに超えており、アダムズの著作を完全に咀嚼した後、改めて論文に纏めている点が特に高く評価される。

そうした例として、アダムズの難解な技術論であり、彼の作品制作の中核をなす「想定」（visualization、即ち、撮影前に撮影対象の最終画像を心に描く行為）や、その「想定」を可能にするアダムズの技術、特に明暗の対比、画面のトーンを制御するヴァリュー制御技術に基づく「ゾーンシステム」についての分析と考察は、論者の独壇場といえる。その結果、卓越した技術を持ってして初めて可能であった、偶然性の介入を極限まで排するアダムズの写真制作思想の考察は、独創性に富み、説得力がある。

本研究では、風景写真家としてのA．アダムズの自然観に関して、彼の自然の「原型」が、ゴールデン・

ゲートの見える海辺で育った幼少期から、都市化によって失われていった海浜と砂丘を後にして、ヨセミテ渓谷を訪れ、またシェラでの山行きを楽しんだことに認められると、主に『自叙伝』から考察されている。さらに加えて、アダムズの自然観を際立たせる目的で、正岡子規の『旅の旅の旅、河口慧海『西域旅行記』や会津八一の詩歌を引いて、日本人の自然観を比較対比している点も評価される。

特に、俳人や歌人が歌を詠むとき、アダムズの「想定」と同じく、心に画像を描き、また、それを鑑賞する側にも、それに近い画像が心に描かれるとの指摘には鋭いものがある。

本研究では、A. アダムズの作品は、自然をそのまま捉えて表現したのではなく、自然を強調して再現したものであり、その視覚的特長は、精緻、精密、細密で鋭敏な画像にあると考察されており、結論として、アダムズが提唱した、「想定」に基づきヴァリュー制御を駆使して制作される「創造的写真」が、油彩画、水墨画、日本画、水彩画、石板画、銅版画、木版画等と同じく絵画の領域に入る資格を備えており、絵画と同列の芸術作品であるとされる。

こうした問題提起は、これまでなされることはなく、論者の独創である。そして、結論に導くまでの論旨の展開も確実であり、説得力のある提案となっている。

2．学位論文審査結果の要旨

以上のとおり、「創造的写真」を提唱し、H.W.Jansonの『美術の歴史』(2004年版）にも採用されている、写真家アンセル・アダムズの研究は、日本におけるアダムズ研究の第一人者であるばかりでなく、写真制作技術にも精通した論者の、いわば独壇場である。そのため、その巧みな日本語訳で示されるアンセル・アダムズの著作に基づく実証的研究法には、高い信憑性が認められる。

従って、本研究は宝塚造形芸術大学の博士（芸術学）の学位請求論文としての要件を充分に満たしている、という結論に達した次第である。その根拠として、以下の点が指摘できる。

1）研究テーマの独創性

従来、カルティエブレッソン（Henri Cartier Bressonn）やキャパ（Robert Capa）等の報道写真家を中心にした作家論は存在するが、それらは、「決定的瞬間」という言葉が示すように、主に写真機の機能を駆使した、ある瞬間を捉える技術を中心にしたものであった。

それに対し、本研究では、極限まで偶然性の介入を排するアダムズの風景写真が、被写体の決定、撮影、現像、焼付けのいかなる段階においても、完璧な技術に裏打ちされていることを実証している。

そして、アダムズの銀塩写真の耐久性の高さも相俟って、いまや、アンセル・アダムズの提唱する「創造的写真」が、彼の写真制作思想、写真制作技術、および高い芸術性から見て、油彩画や日本画等の「絵画と同様に美術であり、高度な芸術作品である」との提唱は、説得力があるとともに、真に独創的である。

2）実証的研究方法の徹底

本研究の方法論的な基礎は、論者が経験した早稲田大学大学院修士課程、及び、カリフォルニア大学（ロサンジェルス校）大学院修士課程の両大学院の美術史研究科における研究歴と、神戸芸術工科大学等における教育・研究経験において培われたものである。それは、早稲田大学で得た会津八一の研究法の踏襲や、長期にわたる米国滞在中にマスターされた卓越した語学の理解力を駆使した文献の分析と考察に表れており、加えて、論者が両大学から共通して受けた、実証主義研究法の徹底が、本論文の評価すべき点の一つ

である。

3）文献研究における正確さ

上記のとおり、論者の語学力には見るべきものがある。特に、‘visualization’などの重要な概念であると同時に、安易に直訳に走りかねない用語法を、熟慮の結果平易にして明快な「想定」なる言葉を充てるなど、審査委員が「眼から鱗」の感覚を覚える表現が再三見られた。

こうした高い語学力は、A. アダムズの著作である、いずれも、Little Brown Company社から出版された、*Ansel Adams-An Autobiography, The New Ansel Adams Photography Series Books 1 ～ 3,Examples Making of 40 Photographs*の全てを、単独に翻訳した論者にして初めて可能な業であるといえよう。

4）論旨展開の一貫性

本論文は5章で構成されている。まず、序章においてA. アダムズの年譜を詳細に述べ、第1章にアダムズの写真制作技術の解説と考察、第2章にアダムズの自然観と日本における自然観の比較対照、第3章に本学大学院で習得したPC技術を駆使して、アダムズの作品紹介を行っている。そして、終章には、創造的写真の未来として、アダムズの作品を中心に、美術史における銀塩写真の地位に関する考察を行っている。

以上の構成は、論文構成として、まさにオーソドックスなものであり、気を衒うことなく正攻法で研究の主旨を論述しており、読んでいて安心感があり、かつ、説得力を増している。

5）最終審査結果

宝塚造形芸術大学博士（芸術学）の審査委員会は、主に上記の4点について慎重審議を重ねてきた。

そして今回、日本におけるA. アダムズ研究の第一人者としての論者が、博士論文として、その研究成果を集大成された熱意とエネルギーに敬意を表すると共に、本研究が、本学における博士号学位請求論文として、充分にその基準を満たしているとの結論に、審査員一同が達したことを、ここに報告する次第である。